

600字物語010

気の弱い男

作者：エリー

編者：サリー

今日は月曜。週末は土、日、月と3連休。

夕飯に遅れないように走って家に帰ると、長女が妻に「週末は泊まりに行きたい」とせがんでいた。すると妻が「山なら行ってもいい」と言った。しかし、長女は「海じゃなきゃ嫌だ」と言い張った。

長女が一つ年下の長男に援護を求めた。長男は「どこでもいい」と投げやりに返した。怒る妻と長女に押されて長男はぼそりと「都会で美味しいものが食べたい」とつぶやいた。つかさず長女が乗った。長女と長男の連合に負けそうになった妻は、「お父さんはどこがいいの？」と同意を求めてきた。

わたしは家でのもんぶりしたい。しかし言えない。場を乱すのが怖い。

妻に味方して票を割るのか。

子どもたちに味方して結論を出すのか。

選べない。

沈黙が痛い。

「お父さんは具体的な候補地を出し合って、費用対効果を計算して、もう一度決めたらいいと思うよ」

妻と長女はスマホで候補地を探し始めた。山と海に囲まれた避暑地に一泊して、帰りに都会で食事をすることに決まったようだ。

家にいたいわたしの希望はかなわなかったが、みんなの期待に添える一言が言えたのだからわたしは満足だ。

3人ともニコニコしている。

こんなわたしは気が弱いだろうか。